

研究結果説明書

1. 事業の実施期間

令和 4 年 4 月 1 日 ~ 令和 5 年 3 月 31 日

2. CORE ネットワークの構成

(1) CORE ネットワークの名称：高知版 CORE 遠隔教育

(2) CORE ネットワークを構成する高等学校等

- | | |
|--------------------------|----------------------|
| ① 清水高等学校 (受信校) | ② 宿毛高等学校 (受信校・配信校) |
| ③ 宿毛工業高等学校 (受信校・配信校) | ④ 中村高等学校 (配信校) |
| ⑤ 中村高等学校西土佐分校 (受信校) | ⑥ 幡多農業高等学校 (受信校・配信校) |
| ⑦ 大方高等学校 (受信校) | ⑧ 窪川高等学校 (受信校) |
| ⑨ 四万十高等学校 (受信校) | ⑩ 遠隔授業配信センター (配信校) |
| ⑪ 中村特別支援学校 (準構成校として位置づけ) | |

※コンソーシアムの一員として、地域課題活動等に構成校とともに取り組むため、準構成校とする。

3. 調査研究結果の概要

(1) 「教科・科目充実型」の遠隔授業など ICT も活用した連携・協働の取組

(受信教室における体制の在り方に関する取組を含む。)

① 遠隔教育システムを最大限に活用した「教科・科目充実型」の遠隔授業における、教科書の共通化について

これまで教育課程や校時程を緩やかに統一し、本年度は特に、遠隔授業における教科書について統一を進める計画であったため、2校同時配信予定の学校には遠隔授業推奨教科書の選定を依頼した結果、令和5年度には2校同時配信を過去最大の4科目で実施できることとなった。

また、専門高校については令和5年度に初めて遠隔授業を実施するので、生徒の状況を十分把握したうえで、推奨教科書を各校に提案する。

② 専門高校の強みを生かした農業や情報の配信及び総合学科の高校からの芸術科目の配信について

試行配信は計画通り実施できた。試行配信の結果、実習を伴う遠隔授業を効果的に配信するためには、本県の遠隔教育システムに加えて、教科に応じた適切な ICT 機器が必要であることが分かった。

また、実習を伴う遠隔授業においては、授業中の様子を的確に見取り、配信教員に伝えるなど、受信側の教員の役割が大きい。書道 I は 7 名、情報 I は 24 名と 25 名で、配信拠点型の 1 講座受講生徒数平均 2.7 名とは状況が異なるため、受信校側にこれま

で免許外で授業を担当していた教員に相当する者を遠隔支援教員として配置し、生徒の見取りやT2として授業に参画することが必要であることが分かった。そこで、令和5年度からの配信拠点型「情報I」においても、受信側に免許外教科担当教員に相当する者を配置し対応していく。

農業については、本年度は次のア・イについて実施することができた。

ア 専門高校の農場から、農業実習に関する演習

- ・小規模校2校で複数回実施
- ・うち1回は、配信側の生徒が各農場から作物や施設を紹介し、この授業では、生徒同士の交流に加え、学習の成果を生徒自身が発表する場ともなっていた。

イ 双方の農場をリアルタイムに接続し、遠隔による実技指導

- ・1回実施（シクラメンの栽培方法について）

遠隔授業で専門高校の生徒の活動を知ることは、小規模校の農業コースの生徒にとって大きな刺激となり、農業に対する意欲が高まったことが成果であった。

③ 校長の管理監督のもと、教員免許を持たない者を受信教室に配置することについて

COREの小規模校では、教員以外の人材を配置することが難しいことと、教員も配置が限られ、遠隔授業の実施に制限が生じることが明らかになった。

④ キャリア教育等について

本事業では、構成校全体の教育力の向上及び、生徒の進路意識の醸成やキャリア発達の形成のために、遠隔教育システムを活用してキャリア教育講演会、大学生との交流、地域課題探究成果発表会などに取り組んだ。

大学生は高校生にとって、斜めの関係が築け、進路や勉強方法等の悩みに応えられ助言できる存在として重要である。オンラインでの交流、対面交流を含め、大学生と交流した生徒の感想からは、進路や勉強の仕方を見直すきっかけとなったことや、交流した大学生のように挑戦できるようになりたいと思ったことなどが読み取れ、進学意欲の醸成等につながったと考えられる。

また、キャリア教育講演会では、日本や世界で活躍する20代後半の高知県出身者等をロールモデルとして紹介し、生徒が具体的な将来像を描けるように導いている。生徒の感想の多くから、進路に対する視野の広がりや諦めずに頑張ろうという意欲が読み取れた。質疑応答では各校から積極的に質問する様子も見られた。

地域課題探究成果発表会では、構成校8校を含む県内18校を遠隔教育システムで結んで開催し、各校の県や市町村等に対する課題解決策の提案等、他校の取組を知るとともに交流することができた。また、個人探究として、工業高校の3年生が夏期休業中にルワンダで道路造りに参加した体験を発表し、参加の生徒たちに刺激を与えた。

(2) 学校間連携を行うための運営体制に関する取組

遠隔授業推進プロジェクトチームの推進体制のもと、教育センターと遠隔授業配信センターが役割分担して本事業に取り組んでいる。遠隔授業配信センターでは、令和5年度から教科「情報」の遠隔授業を開始し、情報担当の専任教員を含め6名体制となる。

学校間連携を円滑にするための事務取扱については、令和5年度からの情報Ⅰや学校相互型遠隔授業で対応できるように内規を本年度中に改正する。さらに、教頭（または主幹教諭）を遠隔教育の主担当としてに内規に明記し、さらに円滑な運営・学校間の連携を進めていく。

(3) 市町村、高等教育機関、産業界等との協働によるコンソーシアムを構築し、学校外の教育資源を活用した探究的な学びなどによる教育の高度化・多様化に関する取組

- ① 令和3年度に幡多・四万十地域（宿毛市、土佐清水市、四万十市、四万十町、大月町、三原村及び黒潮町の区域をいう。）において、地元の産業界や市町村及び県立学校からなる幡多・四万十地域教育協働コンソーシアムを設置した。

本コンソーシアムは、各地域の小学校、中学校、高等学校等の教育活動や人材育成に関する取組について相互理解を図るとともに、産業界をはじめとする学校外の地域資源を活用した教育の高度化・多様化の取組を協働して推進していくことで、地域の子どもたちへの教育と人材育成の充実を図ることを目的としており、令和4年度は2回の会議を開催した。

- ② 学校の教育活動を生徒の視点から数値として可視化するために、三菱UFJリサーチ&コンサルティング（株）の「高校魅力化評価システム」を利用した。構成校のうち9校では同システムを使い、「学習活動」「学習環境」「生徒の自己認識」「生徒の行動実績」という4つの観点を「主体性」「協働性」「探究性」「社会性」という4つの資質・能力で分類した指標により高校と地域の活動を評価し、学年による違いなどを読み取った。

4. 調査研究の実績

(1) 実施日程

①遠隔授業関係

年 月	実施内容
4年4月	<p>5・6日：遠隔授業支援教員周知会</p> <p>11日：遠隔授業配信センター授業開始</p> <p>構成校のうち6校に、配信センターから遠隔授業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・清水高校：3年生物(4単位) ・宿毛高校：3年数学Ⅲ(6単位, 橋原高校との同時配信) ・西土佐分校：2年数学Ⅱ(2単位)、2年英語表現Ⅰ(3単位) ・大方高校：1年数学Ⅰ(3単位)、2年数学Ⅱ(4単位)、数学B(2単位) ・窪川高校：1年数学A(2単位)、2年英語会話(2単位) ・四万十高校：1年数学A(2単位)、2年数学B(2単位) <p style="text-align: center;">3年英語表現Ⅱ(3単位)</p> <p>18日：高知県教育長の視察</p> <p>26日：運営連絡会(遠隔授業配信センターと教育センター)</p> <p>27日：キャリア教育講演会(井上有加氏：林業女子会@高知代表)</p> <p>4月中旬～5月末：構成校訪問ヒアリング(CORE評価委員・教育センター)</p>
5月	<p>10日：公務員補習開始、全ての構成校に配信センターから遠隔補習</p> <p>27日：学校相互型遠隔授業(情報Ⅰ)担当者打合せ</p> <p>下旬：スタジオ4設置</p>
6月	<p>6日：大学進学対策補習開始</p> <p>7日：職員連絡会(遠隔授業配信センター)</p> <p>13日：配信拠点型遠隔授業3校同時配信試行(物理)</p> <p style="text-align: center;">運営連絡会(遠隔授業配信センターと教育センター)</p> <p>21日：キャリア教育講演会(中島さち子氏：ジャズピアニスト・数学研究者・STEAM教育家、四万十高校から配信)</p> <p>22日：次年度の遠隔授業使用教科書検討を各校に依頼</p> <p>29日：遠隔授業推進プロジェクトチーム会議</p> <p>6月下旬～7月上旬：英語資格試験2次対策補習</p>
7月	<p>6日：UTFRと清水高校生徒のオンライン交流</p> <p>13日：COREハイスクール・ネットワーク構想に係る実証地域連絡会議</p> <p>22日：NTTdocomoとの打合せ(スマートグラス活用について)</p> <p>28日：職員連絡会(遠隔授業配信センター)</p> <p>29日：UTFRとのオンライン打合せ</p>

8月	<p>3日：学校相互型遠隔授業（書道Ⅰ）配信教員への研修</p> <p>22日：NTTdocomoによるスマートグラス講習（幡多農業高校）</p> <p>25日：NTTdocomoによるスマートグラス講習、移動式遠隔教育システム研修（窪川・四万十高校）</p> <p>30日：UTFRと清水高校生徒の交流・清水中学校での授業</p> <p>7月中～9月上旬：授業向上研修セミナー（オンライン）配信センター専任教員受講（数学、英語）</p>
9月	<p>8日：危険物取扱資格者試験補習開始</p> <p>9日：学校相互型遠隔授業（情報Ⅰ）担当者打合せ</p> <p>13日：学校相互型遠隔授業（農業）試行配信（幡多農業高校・窪川高校）</p> <p>21日：学校相互型遠隔授業（書道Ⅰ）試行配信（宿毛高校・西土佐分校）</p> <p>28日：学校相互型遠隔授業（書道Ⅰ）試行配信（宿毛高校・西土佐分校）</p> <p>29日：運営連絡会（遠隔授業配信センターと教育センター）</p> <p>9月：受講生徒に対する進路アンケートの実施</p>
10月	<p>17日：第1回CORE遠隔教育評価委員会</p> <p>17日：学校相互型遠隔授業（情報Ⅰ）担当者打合せ</p> <p>24日：学校相互型遠隔授業（情報Ⅰ）試行配信（宿毛工業高校と清水高校）</p> <p>26日：キャリア教育講演会（岩本啓寛氏：榑原病院医師、榑原高校から配信）</p> <p>27日：長崎県教育長視察</p>
11月	<p>2日：学校相互型遠隔授業（数学）担当者打合せ（中村高校と教育センター）</p> <p>7日：学校相互型遠隔授業（情報Ⅰ）試行配信（宿毛工業・清水高校）</p> <p>8日：学校相互型遠隔授業（農業）試行配信（幡多農業・窪川高校）</p> <p>9日：学校相互型遠隔授業（数学Ⅱ）試行配信（中村高校・西土佐分校）</p> <p>11日：「COREハイスクール・ネットワーク構想」訪問調査</p> <p>15日：第2回遠隔授業推進プロジェクトチーム会議</p> <p>25日：次年度時間割要望調査</p> <p>29日：COREハイスクール・ネットワーク構想に係る実証地域連絡会議</p> <p>11月～12月：内田洋行教育総合研究所 CORE 事業アンケートの実施</p> <p>11月～12月：次年度遠隔授業配信科目決定</p>
12月	<p>1日：UTFRオンラインミーティング（清水高校）</p> <p>2日：広島県教育委員会視察</p> <p>13日：長崎県教育次長視察</p> <p>19日：「COREハイスクール・ネットワーク構想」Webヒアリング調査</p> <p>22日：運営連絡会（遠隔授業配信センターと教育センター）</p>

5年1月	<p>12日：学校相互型遠隔授業（情報Ⅰ）担当者打合</p> <p>13日：学校相互型遠隔授業（農業）試行配信（幡多農業高校・四万十高校）</p> <p>16日：運営連絡会（遠隔授業配信センターと教育センター）</p> <p>18日：学校相互型遠隔授業（書道）試行配信（宿毛高校・西土佐分校）</p> <p>23日：職員連絡会（遠隔授業配信センター）</p> <p>24日：鹿児島県教育委員会視察</p> <p>30日：学校相互型遠隔授業（情報Ⅰ）試行配信（宿毛工業高校・清水高校）</p> <p>30日：次年度遠隔授業配信時間割案の投げかけ</p>
2月	<p>1日：<u>地域課題探究成果発表会</u></p> <p>7日：第2回CORE遠隔教育評価委員会</p> <p>8日：兵庫県教育委員会視察</p> <p>16日：企画評価会議委員による評価会議</p> <p>21日：COREハイスクール・ネットワーク構想令和4年度成果報告会</p> <p>21日：第3回遠隔授業推進プロジェクトチーム会議</p> <p>24日：次年度遠隔授業配信時間割の決定</p> <p>24日：配信拠点型遠隔授業で情報Ⅰを受講する構成校（四万十高校・窪川高校）への訪問ヒアリング</p>
3月	<p>9日：<u>わせすく会オンラインインタビュー交流（宿毛高校）</u></p> <p>9日：北海道高等学校遠隔授業配信センター視察（遠隔授業配信センター）</p> <p>9日：学校相互型遠隔授業の配信校への訪問ヒアリング及び対面での遠隔授業説明（幡多農業高校・宿毛工業高校）</p> <p>13日：早稲田大学生と宿毛高校生徒の交流</p> <p>15日：RunDo!による西土佐分校生徒への特別授業</p> <p>15日：UTFRと清水高校生徒の交流</p> <p>20日：職員連絡会（遠隔授業配信センターと教育センター）</p>

②コンソーシアム関係

月	実施内容
4年 4月	<ul style="list-style-type: none"> ・高等学校9校で地域課題探究学習を始める。 ・(清水高等学校) 令和4年度第1回地域コンソーシアム会議の開催
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・宿毛高等学校が宿毛青年会議所のコーディネートのもと、コンソーシアム構成団体であるすくも湾漁業協同組合の業務内容等について、フィールドワークも交えて学習した。 ・(中村高等学校西土佐分校) 令和4年度第1回西土佐分校存続推進協議会の開催
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・「高校魅力化評価システム」を9校で実施 ・(清水高等学校) 令和4年度第1回地域コンソーシアム分科会の開催
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・(大方高等学校) 令和4年度第1回地域コンソーシアム会議の開催 ・(清水高等学校) 令和4年度第2回地域コンソーシアム分科会の開催
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・(中村高等学校西土佐分校) 第1回存続推進協議会部会の開催
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回幡多・四万十地域高校教育協働コンソーシアム会議開催 ・(清水高等学校) 令和4年度第3回地域コンソーシアム分科会の開催 ・(中村高等学校西土佐分校) 第2回存続推進協議会部会の開催
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・(中村特別支援学校) 幡多・四万十地域教育協働コンソーシアムの構成委員であるすくも湾漁業共同組合及び高知県農業協同組合幡多地区と協議し、次年度の現場実習等の実施を決定 ・(中村高等学校西土佐分校) 第3回存続推進協議会部会の開催
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・(清水高等学校) 令和4年度第4回地域コンソーシアム分科会の開催 ・(中村高等学校西土佐分校) 第4回存続推進協議会部会の開催
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・(中村高等学校西土佐分校) 第5回存続推進協議会部会の開催
2月	<ul style="list-style-type: none"> ・(大方高等学校) 令和4年度第2回地域コンソーシアム会議の開催 ・(清水高等学校) 令和4年度第5・6回地域コンソーシアム分科会の開催 ・(中村高等学校西土佐分校) 第6回存続推進協議会部会の開催
5年3月	<ul style="list-style-type: none"> ・第2回幡多・四万十地域教育協働コンソーシアム会議開催 ・各校で地域課題探究学習のまとめ及び次年度の計画の周知

※学校における調査研究の実績のほか、コンソーシアムの活動等についても記入すること。

※遠隔授業システムを活用した教育課程外の取組については、アンダーラインを付すこと。

(2) 調査研究実績の説明

- ①「教科・科目充実型」の遠隔授業などICTも活用した連携・協働の取組
(受信教室における体制の在り方に関する取組を含む。)

ア 配信拠点型遠隔授業について

CORE 構成校に対する配信拠点型遠隔授業は、6校に対し、12講座、35単位実施した。県全体では14校に対し、のべ23講座、74単位配信し、このうち2校同時配信を数学Ⅲと物理で実施した。

【令和4年度 CORE 構成校に対する配信拠点型遠隔授業】

教科	科目	単位数	受信校
数学	数学Ⅰ	3	大方高等学校
	数学Ⅱ	2	中村高等学校西土佐分校
	数学Ⅱ	4	大方高等学校
	数学Ⅲ	6	宿毛高等学校 ※2校同時配信(橋原高校)
	数学A	2	窪川高等学校
	数学A	2	四万十高等学校
	数学B	2	大方高等学校
外国語	英語表現Ⅰ	3	中村高等学校西土佐分校
	英語表現Ⅱ	3	四万十高等学校
	英語会話	2	窪川高等学校
理科	生物	4	清水高等学校

(7) 受講生徒アンケート結果

高1～高3の受講生徒（7月：52名、12月：51名）が回答

本年度から、学習の自律化や主体的な学びへの質的転換について生徒自身が認知できるように設問6の（1）～（3）を設け、アンケートを実施

■ 4件法の結果

（4 そう思う～1 そう思わない、設問7のみ4 そう思わない～1 そう思う）

設問	設問	52名		51名		教科						学年					
		全体		数		理		英		1		2		3			
集計月		7月	12月	7月	12月	7月	12月	7月	12月	7月	12月	7月	12月	7月	12月		
設問1	話をしている先生・生徒（同時配信の場合）の声や指示など、音声は伝わった。	3.7	3.7	3.7	3.7	3.6	3.7	3.8	3.7	3.5	3.7	3.9	3.8	3.6	3.6		
設問2	授業配信の先生の表情や反応がよく分かり、やりとりもスムーズだった。	3.5	3.7	3.6	3.8	3.4	3.4	3.4	3.7	3.5	3.6	3.6	3.8	3.4	3.5		
設問3	先生・生徒（同時配信の場合）に気軽に応答（返事）や質問などができた（できる）と思う。	3.4	3.5	3.3	3.4	3.4	3.7	3.5	3.6	3.4	3.4	3.4	3.6	3.5	3.6		
設問4	私は、遠隔授業（習熟度別授業や専門教員（物理・生物）による授業、興味・関心のある選択授業）を受けて、学習意欲が高まっていると思う。	3.3	3.3	3.2	3.2	3.2	3.2	3.5	3.6	3.2	3.3	3.3	3.3	3.3	3.4		
設問5	遠隔授業は、それが無い場合と比較すると自分にとってプラスだと思う。	3.6	3.5	3.6	3.5	3.3	3.3	3.8	3.7	3.7	3.6	3.7	3.5	3.5	3.3		
設問6（1）	予習・復習をするようになった。	3.0	3.0	3.0	2.8	2.9	3.1	3.1	3.3	2.8	2.6	3.1	3.1	3.1	3.2		
設問6（2）	自分の学習の仕方を振り返るようになった。	2.9	3.0	2.9	2.9	3.0	2.9	2.9	3.3	2.8	2.9	2.9	3.0	3.1	3.1		
設問6（3）	見通しを立てて計画的に学習をできるようになった。	2.8	2.8	2.8	2.6	2.6	2.7	3.0	3.0	2.7	2.5	2.9	2.8	2.8	2.9		
設問7	遠隔教育システム・機器について、改善して欲しいことがある。	3.4	3.4	3.5	3.5	2.8	2.9	3.5	3.5	3.4	3.4	3.5	3.7	3.2	3.1		

■ 自由記述の結果

設問6（4）自分の学習の仕方や取り組みの姿勢で変化したこと

	7月回答	→	12月回答
1	分からない所があったら学校の先生に聞くようになった。		こまめに復習をするようになった。
2	自ら進んで学習に取り組むようになった。		興味のあることを自分から調べるようになった。
3	興味、関心意欲が高まったと感じた。		予習をしたり、自ら物理のことを調べること。
4	新しい単語が出てきたとき、付箋などにメモを取るようになった。		苦手なところを重点的に取り組むようにした。
5	目的意識を持った学習に切り替えた。		授業で分からない表現や言い回しがあれば、授業後にすぐ調べるようになった。
6	英単語を自ら調べるようになった。		スラスラと英文が読めるようになった。
7	分からなかったらすぐ答えを見るようになった。		テスト期間以外に復習するようになった。
8	わからない問題があれば答えと解説をみて理解できるようにした。		事前にワークを解いたりするようになった。
9	今まで宿題以外で復習をすることがほとんどなかったけれど、自分から復習するようになった。		中学生の頃よりも復習する回数が増えた。
10	無回答		プリントを見て復習し内容の確認をする。

	7月回答	→	12月回答
11	特にない		よく単語を調べるようになった。
12	無回答		自主性が身についた。
13	無回答		自分なりに理解できるよう、復習の際に工夫するようになった。
14	無回答		前まではテスト前の一夜漬けがほとんどでしたが、最近になって復習などを心掛けるようになった。
15	前は、家で勉強しなかったけど勉強するようになった。		特にない（ただし、設問6(1)～(3)の回答が全て4そう思う)
16	授業がない日に先生に聞くことができないので今まで(他の)授業よりも友達と確認しあって勉強したり、自分で調べたりしながら予習や復習ができるようになった。		無回答（ただし、設問6(1)～(3)の回答が全て4そう思う)
17	以前より英語を勉強する時間が増えた。		無回答（ただし、設問6(1)～(3)の回答が全て4そう思う)
18	毎日数学をする習慣がついた。		無回答（ただし、設問6(1)～(3)の回答が全て3そう思う)
19	自分の苦手な分野を分析するようになった気がする。		無回答（設問6からみると、予習・復習及び自分の学習の仕方を振り返りができていないと自己評価している)
20	家で分からなかった所を復習するようになった。		無回答（ただし、設問6(1)～(3)の回答は、全て3そう思う 以上)
21	より目標を意識して取り組むようになった。		無回答（設問6からみると、予習・復習はするようになったと回答)

(イ) 受信校教員（遠隔支援教員）アンケート結果

受信校教員（7月：29名、12月：28名）が回答

■ 4件法の結果

（4 そう思う～1 そう思わない、設問7のみ4 そう思わない～1 そう思う）

※ただし、設問7については、令和3年度は「4：そう思う～1：そう思わない」で調査した。

集計月	設問	令和4年度		令和3年度	
		7月	12月	7月	12月
設問1	話をしている先生・生徒（同時配信の場合）の声や指示など、音声は適切であった。	3.9	3.8	3.7	3.7
設問2	配信教員の表情や反応がよく分かり、やり取りもスムーズだった。	3.8	3.9	3.3	3.4
設問3	生徒は、先生・生徒（同時配信の場合）に気軽に応答（返事）や質問などができた（できる）と思った。	3.5	3.5	3.5	3.5
設問4	生徒は遠隔授業（習熟度別授業や専門教員（物理・生物）による授業、興味・関心のある選択授業）を受けて、学習意欲が高まっていると思った。	3.4	3.4	3.4	3.3
設問5	遠隔授業は、それがない場合と比較すると生徒にとってプラスだと思った。	3.4	3.6	3.6	3.5
設問6	遠隔授業を受けて、生徒の学習への取り組み姿勢に変化がありましたか。	3.1	3.0		
設問7	遠隔教育システム・機器について、改善して欲しいことがある。	3.4	3.3	1.7	1.4

■自由記述の結果

設問6 (4) 自分の学習の仕方や取り組みの姿勢で変化したこと

	7月回答	12月回答
1	意欲的に取り組んだり、粘り強く学ぶ態度が見られるようになった。	進学に向けた学習意欲が向上している。
2	授業のペースが生徒に合っているので、意欲的に取り組んでいる。	生徒のレベルに合った授業内容なので、授業の最初から最後まで意欲的に取り組んでいる。
3	生徒が意欲的に発言するようになりました。また、集中力も向上した。	先生に積極的に質問を投げかけていて、問題解決をしながら授業に取り組んでいる。先生とコミュニケーションが取れることで集中力が持続するようになった。
4	授業の復習・授業課題等にまじめに取り組む、日々の授業内容を自分のものにできている。	入試に向けての対策方法を知ることで、少しずつ入試に対する姿勢が変化した。
5	少人数のため緊張感を持って取り組んでいる	緊張感を持って取り組んでいる
6	選択学習できたという安心感と、少人数で実施してもらっているという特別感、また緊張感などから集中できている。	進路への必要度合いと少人数実施ということで選択者としての自覚も強く、より主体的に取り組んでいる。
7	進学校の学習スピード、レベルを体感でき、頑張らねばと奮起している。模試に関しても関心を持っている。	受験や模試に対する意識づけができるようになった。
8	自主的に学習に向かうようになったと感じる。	家庭学習の時間が増えた。
9	課題等抜かりなくできている。	課題への取組等、意欲的になった。
10	主体性がより高まったように感じる。	夏季休業期間中なども含め、授業時間外の、Googleクラスルームでの課題のやり取りなどで、学習に向き合う姿勢が保持された。
11	少人数のため緊張感をもって授業に取り組んでいる。	授業への集中力、宿題や課題への取り組みが変化した。
12	1年生なので、前年度との比較はできませんが、生徒同士で分からないところの確認をしたり、提出物の確認をしたりと、前向きな姿勢が見られる。	生徒同士で、分からない箇所を教えあったりしている。ほとんどの生徒が、課題のプリントなどを自身で管理できており、自分たちから支援教員へ提出できている。
13	一定以上のレベルの授業についていくために、予習・復習をするようになったと思う。	科目に対する意欲が高まっているように感じる。
14	苦手な教科でもチャレンジしようと思うようになった	前向きに学習に取り組めた。
15	前向きに課題等に取り組んでいる。	発展的な内容に挑戦しようとしている。
16	置いていかれないためにその日の復習をするようになった	授業での問題など、生徒同士で確認し、教え合う場面が見られた。
17	生徒は、希望進路に向け意欲的に取り組むことができている。また、遠隔の進学補習にも参加している。	授業の回数を重ねるごとに、生徒の意識が高まっている。
18	時間に余裕をもって移動したり、見通しを立てて動けるようになったように思う。	緊張感をもって授業に臨んでいると感じる。
19	無回答	他校といっしょに授業を受けているので、いい意味で刺激があるような気がする。
20	無回答	変化についての回答としては、「わからない」というのが本音。少なくとも実施前の生徒の状況を知らない、「あった」とも「なかった」とも答えにくい。ただ、意義はあると思うし、伸びている部分があるので「少しある」とした。

	7月回答	12月回答
21	無回答	ポイントノートなどの課題を自ら行うようになった。自分たちから少しずつではあるが、質問を行うなどの主体性が身につけているように感じた。
24	物理に対する意欲が実験等通してあがってきています。	無回答
22	普段の授業とは違う雰囲気です。先生のお人柄のおかげで、難しいけど授業を楽しみに学校に来ています！と話している生徒もいる。	無回答
23	生徒の能力に応じた学習が展開できるので意欲が高まっているように感じた。	無回答

イ 学校相互型遠隔授業

遠隔授業における、実習を伴う教科の指導方法について研究した。CORE 構成校の強みを生かして、学校相互型の遠隔授業を試行し、その成果を明らかにするとともに、実習の指導法について研究した。

(7) 機器環境について

それぞれの教科に適した ICT 機器を使うことで、指導の質が高まることが明らかになった。

【書道】配信校：書画カメラ、ペンタブレット

- ・書画カメラによって配信教員の手元を映し出せて、筆遣いが非常に分かりやすくなった。
- ・ペンタブレットは画面上で生徒の文字に重ねて朱色で添削することができた。

【情報】受信校：パソコン室、1人1台端末

- ・パソコン室では作業画面と配信画面を別々の画面で同時に映すことができ、課題や指示が的確に行なえた。
- ・1人1台端末では、資料や映像等がタッチパネル操作によって自分が見やすい大きさに拡大できる。
- ・1人1台端末では、生徒の様子や表情が直接、配信教員に伝わる。

【農業】移動式遠隔教育システム、スマートグラス

- ・圃場から直接、授業を送受信できた。
- ・スマートグラスは両手が使え、高画質で鮮明な映像により作業手順が、細部まで見て取れ受講者にとって分かりやすかった。

(イ) 実習を伴う遠隔授業における受信校側の遠隔支援教員の資質や役割について

- ・受信校側の支援教員への聞き取りから「自分が配信教員ならば、演習の見取りにはどのような映像が必要かを考えて行動した」「生徒の気持ちの変化に気づき、その場で対処し配信教員に適切に伝えることが、自分の役割だと思った」等の意見が得られた。これらのことから、受信校側の支援教員は配信校教員の立場に立って、生徒が映るカメラの画面を操作することや、授業中の様子を的確に見取り伝えることが重要であることが明らかになった。
- ・実習を伴う遠隔授業では、特に、配信校と受信校の教員が役割を分担し、連携して授業を進めて行くことが必要である。加えて情報Ⅰは必修科目であることから、クラス全員が対象となるため、受信校側には免許外教科で情報を担当できる教員が不可欠である。

(ウ) 実習を伴う遠隔授業を受けた生徒の評価や変容について

専門教員による指導は、遠隔授業においても効果が高いことが明らかになった。

書道では、専門教員の具体的な添削指導や声掛けによって生徒の技能は格段に向上した。どこに注目して書けばいいのか、何を意識すべきかを生徒自身が理解し、修正することができた。また、クラス担任から「書道の授業が一番おもしろい」と話す生徒の様子が伝えられたことから、専門教員の指導によって生徒の学びに向かう姿勢が変化したことがわかる。

情報では、身近な具体例、例えば野球のサインや南京錠等をあげて分かりやすく説明し、専門用語に対する生徒の理解が深まった。特に、実際に Web ページを検索し URL から正規の Web ページであるか判断したり、コマンドプロンプトへの入力をしたりするなどの演習により、生徒の興味や関心が高まった。

農業では、次世代型ハウスを使ったトマト栽培において温度管理をクラウドで行っていることなどを学び、次世代型農業について理解が深まった。同じ作物であっても、自校の栽培方法とは異なる方法を知って、農業に対する興味がさらに高まった。

ウ 校長の管理監督のもと、教員免許を持たない者を受信教室に配置することについて明らかになったこと

本県の配信拠点型遠隔授業は、一講座平均の受講生徒数は 2.7 名（令和 3 年度は 3.3 名）であり、小規模高校の教員数の少なさを考慮し、校長の管理監督のもと、教員免許を持たない者を受信校に配置することを研究することとした。しかし、受信校側で遠隔授業に立ち会う、教員以外の人材の確保が、本県の中山間小規模校では難しく、実現できなかった。

試行した構成校では、教員数が限られるため時間割の調整が難しく、授業には教員が立ち会うが、週4回の授業のうち3回程度、事務職員が授業前の機器の立ち上げに対応した。

一方分校では、事務職員も本校勤務が主で配置されており、機器の立ち上げの分担ができなかった。また、実習助手が配置されていない小規模校も多く、そのような学校では学習支援員の雇用さえも地域で人材を確保することが難しかった。

このように、COREの小規模校では、教員以外の人材を配置することが難しいことと、教員も配置が限られ、遠隔授業の実施に制限が生じることが明らかになった。

エ キャリア教育等から明らかになったこと

キャリア教育講演会では、日本や世界で活躍する20代後半の講演を実施した。本県の教育委員会検討会（R4.5.26）で「良い取組なので、地域の中学校や他の高校にも広げたらどうか」という意見をいただき、本年度第3回から、対象を全県立高等学校に拡充した。

また、大学生の交流事業では、中山間地域の小規模高校に東大・早稲田大をはじめとする難関大学等の大学生を派遣することができた。昨年度からオンライン交流と対面交流を実施し、対面の良さ、オンラインの良さをそれぞれ実感することができた。

<令和3～4年度実績>

清水高校（UTFR）	：対面5回、オンライン1回
宿毛高校（わせすく会）	：対面2回、オンライン1回
西土佐分校（RunDo!）	：対面1回、オンライン1回

キャリア教育は、身近に大学を卒業した者や大学生がいない中山間地域では、特に生徒の進路意識の醸成に不可欠なものであるということが明らかになった。オンラインも活用しながら、県内外の大学生徒の交流をさらに進めていく。

② 学校間連携を行うための運営体制に関する取組

ア 教育センターの運営体制及び本県の推進体制について

本県では、令和元年度に、教育次長をリーダーとして担当各課長等からなる遠隔授業推進プロジェクトチーム及び、実務担当者からなる作業チームを設置し、遠隔教育ネットワークの構築、円滑なシステム運用・保守管理とともに、遠隔授業を担当する専任教員の配置、教育課程の編成、教科書の採択、著作権対応、システム導入校での遠隔授業内規等遠隔授業に係る全ての事項について一体的に取り組んできた。本事業においては、このチーム体制が推進力となって、学校間連携及び事務局と学校との連携、教育委員会内の連携を進めることができています。

イ 遠隔授業配信センターの運営体制について

- ・令和4年度は、配信センターに遠隔授業担当の専任教員5名（数学3名、英語2名）、及び時間講師2名（理科）を配置。そのうち管理職員として副校長及び主幹教諭を配置。令和5年度は教科「情報」の遠隔授業を開始することから、情報担当の専任教員を含め6名体制となる。
- ・遠隔授業を配信する専任教員は、主の所属「配信センター」に加えて、配信先の高校教員としての勤務も命じられており、人事異動通知書に兼務発令を明記しており、授業や業務を支障なく行うことができています。

ウ 学校間連携を円滑にするための事務取扱について

- ・本県では、遠隔授業に関する事務取扱については、高知県教育委員会規則第2号「高知県立高等学校における遠隔授業の実施に関する規則」（令和2年3月31日公布）によるほか、内規「遠隔授業に係る運用」を定め実施してきた。内規で、遠隔配信教員や遠隔支援教員の用務、教務に関する事項（対面授業の考え方、定期試験の取扱い、成績処理の手続き等）について県で統一し、配信センターと受信校側との共通化を図ることができています。
- ・内規の見直しはその都度必要であるが、遠隔授業に関わる学校、教員、教育委員会事務局の共通の理解のために必須のものである。さらに、単位認定を伴う遠隔授業を初めて実施する学校には、前年度のうちに内規の説明を行い、年度当初に遠隔支援教員に対して遠隔教育システムの機器操作講習を含めた周知会を実施している。

エ 学校相互型授業に係る運営体制について

平成27年度からの研究では、本県でも学校相互型遠隔授業から取組を始めていたが、その際には、内規やマニュアルなどがそれぞれの学校間のみで決められており、県内全体へ遠隔授業に対する理解が進まなかった。このことから、本事業の学校相互型においても、県統一の内規で対応することとしており、県内全域に遠隔教育を推進するうえでは、県統一の内規が有効であることが分かった。

③市町村、高等教育機関、産業界等との協働によるコンソーシアムを構築し、学校外の教育資源を活用した探究的な学びなどによる教育の高度化・多様化に関する取組

令和4年10月19日に開催した第1回コンソーシアム会議では、宿毛高等学校とコンソーシアム構成団体であるすくも湾漁業協同組合が連携した、地元の産業を知ることがテーマに実施した取組について、宿毛青年会議所が代表して実践発表を行った。

その後、7名程度の3つのグループを編成し、まず、県立学校長から「県立学校が地域と連携して取り組んでいること」について取組状況等を共有し、人材育成に関する相互理解を深めるとともに、今後充実していきたい取組や新たに地域と連携して取り組みたいテーマ等について、産業界等及び市町村教育委員会の委員と意見交換を行った。意見交換では「地域と連携した取組を行うことで、地元から県外に進学、就職しても、また地元に戻ってくる人材が増えたか」、「県外に就職した生徒は、Uターンしているのかどうか」、「幡多・四万十地域における人口減少」など、地域の担い手に関する意見や、「地元の企業と連携した探究活動の実施」、「子ども達には地域や企業と連携した体験や経験の重要性」、「全体的な障害者雇用の中で、学校と企業が情報を共有することを通じて、生かせる分野があればマッチすることもある」など、学校と企業の連携の在り方について言及する意見、また、「探究に関する色々なテーマは教員が与えていると思うが、課題は生徒が見つけられないといけない。大事なのは、何をするかではなく、何故それをするのか」「現場を見ていただくと感動がいっぱいある。どこの観光施設でも高齢化で担い手不足となっている。色々な体験メニューを続けていけない事態に陥っている。現場を見ていただき、問題意識として感じ、地元に残って仕事に就くことについて考えてもらうといいのではないか」など、生徒の課題意識の持たせ方に触れる意見が出された。

この意見交換を通じて、中村特別支援学校がコンソーシアム構成団体であるすくも湾漁業協同組合と高知県農業協同組合幡多地区と協議し、令和5年度の現場実習や就労先として考えてもらえる取組につなげることができた。

令和5年3月22日に実施した第2回コンソーシアム会議では第1回の意見交換をもとにさらに深掘りを行い、具体的な取組へとつなげるために意見交換を行った。テーマは「子どもたちが地元（幡多・四万十地域）に愛着をもつための18年間の過ごし方や子どもに対する関わり方・地域の関わり方」「企業と学校が連携することのメリット（Win-Winな関係の構築）」「生徒が課題を自分ゴト化していくための仕掛け」とし、地域における教育や人材育成に関する相互理解をさらに促進し、地域の県立学校と産業界、市町村等が協働した取組の推進につなげることとした。

本コンソーシアム会議の構成校のうち9校では、学校の教育活動を生徒視点から、数値として可視化するために、三菱UFJリサーチ&コンサルティング（株）の「高校魅力化評価システム」を利用しており、7月に評価システムのアンケートを実施した。12月に、その結果について読み取り、それぞれの高校で活用するため、同システムについての研修会をオンラインで開催した。

また、研究のため、生徒の変容等をみとめるための評価指標として、同システムで用意

している「学習活動」「学習環境」「生徒の自己認識」「生徒の行動実績」の4つの観点
「主体性」「協働性」「探究性」「社会性」という4つの資質・能力で分類した中の「社会
性」に絞り、経年変化や学年による違いなどを読み取った。

本年度の結果として、「学習活動」は9校中5校、「学習環境」は9校中6校、「生徒の
自己認識」は9校中5校、「生徒の行動実績」は9校中3校が昨年度より高い数値を示し
た。また、構成校9校の平均と全国平均との比較においては、全ての項目について構成
校9校の平均が高いという結果を得られている。

【高校魅力化評価システム 「社会性」】

(単位：%)

	学習活動		学習環境		生徒の自己認識		生徒の行動実績	
	R3	R4	R3	R4	R3	R4	R3	R4
窪川	56.8	70.1	76.6	82.1	58.3	63.4	42.6	50.7
四万十	59.6	72.0	82.4	87.5	70.7	67.4	70.5	55.9
大方	85.1	78.4	83.0	82.7	69.1	68.8	65.9	60.1
幡多農	45.6	54.5	69.7	81.4	56.3	68.1	47.4	51.2
中村	60.0	51.9	74.9	74.8	57.1	69.5	58.6	42.8
西土佐	44.0	60.3	76.0	78.6	63.0	61.5	57.3	46.0
宿毛工	49.7	49.3	69.3	73.7	60.5	65.3	51.8	47.0
宿毛	73.0	80.2	75.5	80.3	63.2	63.1	50.7	49.0
清水	68.1	67.9	77.7	78.0	64.0	68.1	47.2	49.4
構成校 9校平均	59.7	58.5	74.5	77.8	63	67.3	54	47.8
全国	48.9	52.8	65.0	70.6	63.3	64.4	40.3	43.4

5. 遠隔授業の実施状況

受信校	教科	科目	遠隔授業を実施した授業回数（対面授業を除く。）
清水高等学校	理科	生物	92
清水高等学校（2講座）	情報	情報Ⅰ	6（試行）
宿毛高等学校	数学	数学Ⅲ	126
中村高等学校西土佐分校	数学	数学Ⅱ	57
中村高等学校西土佐分校	数学	数学Ⅱ	1（本校から試行）
中村高等学校西土佐分校	外国語	英語表現Ⅰ	71
中村高等学校西土佐分校	芸術	書道Ⅰ	7（試行）
大方高等学校	数学	数学Ⅰ	59
大方高等学校	数学	数学Ⅱ	107
大方高等学校	数学	数学B	52
窪川高等学校	数学	数学A	49
窪川高等学校	外国語	英語会話	42
窪川高等学校	農業	総合実習Ⅰ	4（試行）
四万十高等学校	数学	数学A	48
四万十高等学校	数学	数学B	47
四万十高等学校	外国語	英語表現Ⅱ	69
四万十高等学校	農業	総合実習	2（試行）

6. 調査研究の進捗状況、成果、評価（※目標設定シート（別紙様式1 別添4）を添付）

（1）遠隔授業について

① 進捗状況

遠隔授業の実施科目数は、計画の14講座に対して18講座実施した。

このうち、単位認定を伴う配信拠点型遠隔授業が12講座、学校相互型遠隔授業が6講座である。

学校相互型遠隔授業は、「数学Ⅱ」（本校から分校への配信）、「書道Ⅰ」（総合学科の高校から小規模校への配信）、「情報Ⅰ」2講座（工業専門高校から小規模高校Aクラス25名・Bクラス24名それぞれへ配信）、「総合実習」2講座（幡多農業高校から普通科小規模高校2校の農業コースへそれぞれ配信）の計6講座であった。

学校のニーズに応じた遠隔授業の週あたり時間数の全校計については、計画の39時間に対して、配信拠点型遠隔授業12講座の合計35時間の実施となった。配信拠点型遠隔授業では、数学・理科・英語の3教科において学校のニーズに合わせた科目を開設している。このため、生徒の科目選択や人事異動による職員配置により、計画の実施科目及び

週当たり時間数に変更となったが、ニーズに合わせた遠隔授業は実施できた。

学校のニーズに応じた遠隔授業・補習の活用校数は、見込みのとおり「9校」全校で実施できた。令和4年度補習を受講した専門高校2校は、令和5年度から数学と英語において習熟度別講座を開設するために、配信拠点型遠隔授業を受講する。したがって、遠隔授業の活用校数は令和4年度の6校から令和5年度は8校となる。

公務員試験対策補習はニーズが非常に高く、全学年対象の前期では9校52名、1・2年生対象の後期では8校42名の生徒が受講した。

しかし、校長の管理監督のもと、教員免許を持たない者を受信教室に配置することについては、人材が確保できず、研究が進んでいない。授業に加え、遠隔補習やキャリア教育等を実施した。

② 成果

学びの基礎診断等により把握する生徒の学力の定着・向上の状況は、目標値の50%以上増加に対し、18%の増加となった。CORE構成校の1・2年生の遠隔授業受講生徒は、数学・英語で23名、このうち各学年の基礎力診断テスト第1回のB1以上は11名（全体の47.8%）であった。各学年の第2回のB1以上は、13名（56.5%）に増加したが、該当の生徒数を比較した増加率は11名から13名と18%の増加であった。

遠隔授業・補習受講生徒のうち、現役で国公立大学を受験した生徒は7名であり、目標値15名に届かなかった。この受講生徒のうち、5名（愛媛大学1、高知大学1、高知県立大学1、高知工科大学2）が合格した。また、統計外になるが、昨年度の卒業生（遠隔授業受講）が1名高知大学に合格している。

（2）コンソーシアム事業の進捗状況と成果について

令和4年10月19日に開催した第1回コンソーシアム会議では、意見交換を少人数のグループ編成（県立学校、市町村教育委員会、産業界等）とし、それぞれの立場から、県立学校の地域との連携・協働した取組について協議した。協議内容から、現在の幡多・四万十地域における課題や取組の推進にかかる課題など、多くの意見が出された。令和5年3月22日に開催した第2回コンソーシアム会議では、第1回で出された意見を深掘りし、学校と地域・企業が連携した取組につながるよう検討を行った。

県立学校と地域等とが連携した取組としては、宿毛高等学校とコンソーシアム構成団体であるすくも湾漁業協同組合とが連携して「すくも湾を知ろう」というテーマで事前学習2時間、当日活動6時間、事後学習4時間を使い活動した。また、中村特別支援学校では、コンソーシアム構成団体であるすくも湾漁業協同組合及び高知県農業協同組合幡多地区と協議し、次年度の現場実習等を実施することを決定した。

客観的に学校の取組を評価するため、三菱UFJリサーチ&コンサルティング（株）の

「高校魅力化評価システム」を活用し、「学習活動」「学習環境」「生徒の自己認識」「生徒の行動実績」という4つの観点を「主体性」「協働性」「探究性」「社会性」の4つの領域で数値として可視化した。その中でも「社会性」に絞り、変化を読み取ったところ、本年度の結果は、「学習活動」は9校中5校、「学習環境」は9校中6校、「生徒の自己認識」は9校中5校、「生徒の行動実績」は9校中3校が昨年度より高い数値を示した。また、全国との比較においては、各校とも全国平均より概ね高い割合の結果を得られている。

12月には、高校魅力化の必要性と高校魅力化評価システムを活用したアンケート結果の読み解きのポイントを理解することで、自校の取組の振り返りを行うことや、アンケート結果を関係者間で共有することで、各校の今後の取組の充実につなげることを目的とした高校魅力化評価システム活用方法研修会を実施した。

この研修会では各校の目指す生徒像の実現に向けて、日頃意識している教育実践と「高校魅力化評価システム」の項目を対応させ、次年度に向けた取組の検討も行った。

(3) 評価

ア 本県のCORE遠隔教育評価委員からの評価

- ・ 現段階の評価 「A マイナス」
- ・ 成果目標の数値で見ると2～3項目で達成できていないところがあるが、全体ではコロナ禍で1人1台端末が導入され、それに合致した新しい取組を進めており、事業自体は拡大している。
- ・ ただし、この3年間の取組が終わった後に、どこに帰着するかが重要である。方向性を時代と子供の状況に合わせてどう集約させるか、高知版「大高知高等学校」を想定して取り組んでもらいたい。特に学習の質として、個別最適な学びが推進されるように、様々なアイデアを盛り込んで、次につながるようにして欲しい。

イ COREハイスクール・ネットワーク構想企画評価会議委員からの評価

- ・ 高知県の取組は、できないから何とかしなければならないというところからスタートしたが、今や充実させながら、いかに生徒の学びを深めるかを視野に入れて取組をしていると思うので、両面について今後もしっかりと続けていければいいのではないか。
- ・ 前年度の言い方になってしまうが「大高知高等学校構想」だ。どこの高校生も大高知高等学校の生徒だというような条件整備になっているのは素晴らしいと思う。最初は受験を対象にしていたが、今やそうではなくなってる中で、いろいろと改善されている。高等学校の集合体には足りないこともあるが、足りないところはICTやネットワークを使って補い合える。どの子供も遠くまで行かなくても、高知県が用意する高等学校教育を受けることができるという、安心感や信頼感が支えになっていくのではないかと。そして、中村特別支援学校の生徒に対する理解などにもつながっ

ていくといいと思う。他県と比較して成果を競う必要はない、高知県の取組は進んでいる。

7. 次年度以降の課題及び改善点

(1) 遠隔授業について

配信拠点型遠隔授業では、アウトカムの結果を踏まえ、「学習の自律化」をさらに徹底していく。また2校同時配信を増やし、対話的・協働的な学びを進める。また、「情報」の免許外教科担任制度の解消に向け、令和5年度から配信拠点型遠隔授業に「情報Ⅰ」を加える。「情報Ⅰ」は1クラス全員を対象とするため、受信教室における体制の在り方等について新たに研究を行う。

学校相互型遠隔授業では、令和4年度の研究を継続し、数学、書道においては、試行から単位認定へと取り組みを進めていく。

農業での実習は、年間の実習計画を合わしたり、作物の種類を同じにするなど、配信側と受信側の実習環境が似たものでないと単位認定を伴う遠隔授業は難しいことが分かった。そこで次年度は、講義中心の単元を限定して遠隔授業を行うとともに、配信校・受信校側で密に打ち合わせを行い内容の充実を図る。

工業専門高校からは、「情報Ⅰ」においてプログラミング等専門性の高い分野を配信し、小規模高校の免許外教科担任教員への支援方法や連携・協働の在り方等について研究する。

(2) コンソーシアム事業について

次年度は本年度の意見交換の内容を踏まえ、管理機関がコンソーシアム関係委員及び団体にヒアリングを行い、教育資源に関する情報収集を行う。収集した情報を一定の形式にまとめ、このエリア内でさらなる連携・協働を進めるため、地域における探究学習等に活用できるヒトやモノをリスト化した「教育資源バンク」の構築に取り組むこととしている。

また、子どもたちが活動する場は、それぞれの地域単位が多いことから、高等学校が立地する地域を単位として、地域ごとの「地域コンソーシアム」の構築を進めている。令和4年度時点では構成校9校のうち大方高等学校、清水高等学校が設置を完了しており、次年度は窪川高等学校、中村高等学校西土佐分校及び四万十高等学校で設置予定である。その他学校についても、コンソーシアムが構築できるよう伴走支援を行っていく。

「高校魅力化評価システム」については、経年変化や学年による違いなどを、学校ごとの取組に照らしながら読み取ることが大切である。そのために、この評価システムを活用するための一斉研修会に加え、各学校における研修会も開催し、各学校の取組や地域の教育環境との関連を学ぶとともに、生徒の社会性を育むために、学校として、地域として、何ができるのかを考える機会を多く提供していきたい。